

人やものとかかわることを大切にされた地域素材の開発

—複式中学年「鯉にこいして」の実践を通して—

佐藤 健

1 はじめに

本実践は、複式中学年の地域学習を対象としたものである。来年度完全実施される新指導要領では、中学年社会科は目標・内容が一本化されている。つまり、2年間という長いスパンで柔軟に教育課程を編成することが可能となる。「小学校学習指導要領解説社会編」によると、第3学年及び第4学年の「3内容の取り扱い」(5)は次の通りである¹⁾。

「ウの『県(都、道、府)内の特色ある地域』については、伝統的な工業などの地場産業の盛んな地域と地形から見て特色ある地域を含めて取り上げること。」(下線;筆者)

ここでいう「伝統的な工業などの地場産業の盛んな地域」とは、「県(都、道、府)内で古くから伝わっている技術や技法を受け継いで行われている工業や地域の特性を生かして独自の製品をつくっている工業など、地域に密着した産業の盛んな地域」を指している。

本実践では、広島県を代表する産業の一つである「養鯉業」を取り上げ、来年度を見越し、同単元同内容異程度の指導を試みた。これまでは、異単元異内容の指導を行ってきたが、学年の違う子どもたちが、同じ教室で同じ内容を学び合うことで、互いの考えや発想のよさを共有しながら、学習を深めていくことができると考えたからである。これらの学習の中で、様々な人やものとかかわることができることを期待し、単元を構想した。

2 研究仮説と分析の視点

本実践では、研究仮説を以下のように設定した。

児童にとって身近な地場産業の一つである養鯉業を取り上げるならば、児童は、養鯉業に携わる人と進んでかかわり、文化の面からニシキゴイを受け入れている海外との結びつきに目を向けるであろう。

また、研究仮説にかかわる分析の視点は次の通りである。

分析の視点①; 地場産業の一つである養鯉業を取り上げたことは、児童の人とのかかわりを促したか。

分析の視点②; ニシキゴイが海外で広く受け入れられていることから、児童は、ニシキゴイと海外との結びつきを文化の面から捉えることができたか。

3 実践事例 複式中学年「鯉にこいして」

(1) 単元の概要

① 単元について

本単元は、大正時代から受け継がれている技術に基づいた広島県の地場産業の一つである養鯉業の概要やその役割を捉えると共に、養鯉業に携わる人々の工夫や努力に目を向けることが主な内容である。広島県は新潟県と並ぶ錦鯉の産地として有名である。プロ野球球団—広島東洋カープともなじみ深い。広島市及びその周辺や県中央部の久井町・大和町等が代表的な産地である。久井町には千を超えるため池がある。また、粘土質の土壌や緑に囲まれた豊かな水が養鯉業に好都合という。近年は、東南アジアや欧米向けの輸出が急速に伸びてきており、「ニシキゴイ文化」の国際化が進んでいる。

本学級の児童は、具体的な調査活動を好んでいる。これまでの社会科の学習において、めあてをもち、意欲的に調査活動に取り組むことができた。前期は、異単元異内容の学習を行ってきたが、本単元では、来年度を見越して同単元同内容の学習を行っていく。事前調査から、児童は、広島県の特産品として、広島カキ、松茸、お好み焼き等をイメージしていることが明らかとなった。また、少数であったが錦鯉を特産品と捉えた児童もいた。

② 指導目標

- 身近な地域の産業である養鯉業の様子やそこで働く人々の工夫や努力、さらには海外との結びつきを意欲的に調べることができるようにする。
- 養鯉業に関する資料を収集したり、効果的な聞き取り調査を行ったりすると共に、自分の興味のある内容を新聞などにまとめることができるようにする。
- 広島県の錦鯉は、自然条件や人々の努力をもとに地域の特産品として発展し、今日では世界各地に輸出されるなど高く評価されていることを理解できるようにする。

③ 指導内容と計画……………13時間

- 第一次 広島県の主な産業…………… 1時間
- 第二次 広島の錦鯉…………… 7時間
 - ・ 広島と鯉養殖 ・ 自然条件と鯉養殖 ・ 鯉に恋した人々 ・ 養鯉場の見学
- 第三次 様々な地域とつながるニシキゴイ…………… 2時間
 - ・ 錦鯉の二大産地―新潟と広島 ・ 世界各地の文化とニシキゴイ
- 第四次 まとめの発表会…………… 3時間

(2) 「人やものとのかかわり」について

地域の養鯉業を取り上げた場合の「人やものとのかかわり」を見ていく。

まず、「人」では、養鯉業に従事する人々の工夫や努力が挙げられる。また、ニシキゴイを海外に広めた人、海外での普及に努力している人々も挙げられる。錦鯉にかかわるプロの技術や思いに直接触れることは、子どもたちの地域に対する理解や愛情を深める上で意義があると考えられる。

次に、「もの」について見ていく。先にも述べたとおり、錦鯉は広島県を代表する特産品として国内だけでなく、今日では広く海外でも愛好されている。つまり、ニシキゴイが日本と海外とを結ぶ掛け橋の役割を担っている、とも言える。「泳ぐ芸術品」とも呼ばれるニシキゴイを通して、地域と日本国内、さらには、海外との結びつきをその国々の文化と絡めて理解することが可能である。

上記の点を、「人やものとのかかわり」で整理すると次のようになる。

人	養鯉業にかかわる人（錦鯉生産者、海外の輸入業者）
もの	もの：地場産業としての錦鯉，世界を結ぶ泳ぐ芸術品としてのニシキゴイ 文化：ニシキゴイと各国の文化

(3) 実践の概要

① 第一次の概要

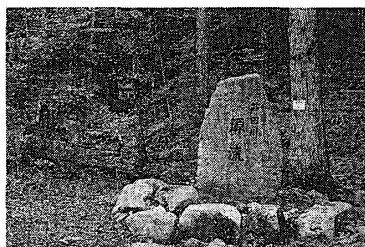
第一次では、「広島県―特産品マップ」づくりを行った。水産物、農作物、工芸品、その他の視点からの資料を配付した。子どもたちは、資料から読み取ったことを発表し、県白地図に記入していった。広島カキ、マツタケ、ピオーネ、針、筆、たんす、琴など広島県にはたくさんの特産品があることに気づくことができた。この「特産品マップ」は教室に常掲し、調べ学習をした子どもが発表し、シールを貼っていけるようにした。

② 第二次の概要

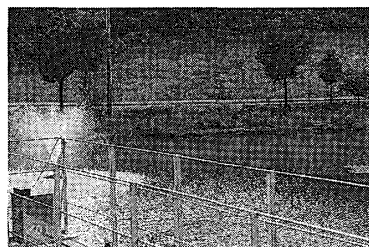
第1時では、「広島と鯉の深い結びつきをさぐる！」のめあてのもと、広島と錦鯉のかわりを見ていった。電話帳で、「鯉」「カープ」「鯉城」のキーワードの付く企業を探していくと、10分ほどで「〇〇鯉」「カープ〇〇店」「鯉城〇〇」といった名前の企業を48件見つけることができた。次に、広島県内にある養鯉場を「特産品マップ」に貼っていった。広島県内には35もの生産者組合がある。単一の養鯉場も含めれば百を超える生産者がいると言われている。さらに、広島ゆかりの「カープ」を取り上げ、球団創設期の命名にかかわる事実を伝えた。これらの学習から、子どもたちは広島と錦鯉とのかわりを具体的に捉えることができた。

第2時は、「錦鯉はどのように育てられているのだろうか？」のめあてで、養鯉業の概要を見ていった。県内の養鯉業者のVTRと取材した写真や8mmビデオをもとに、産卵、選別、越冬、野池への放流など、一連の鯉養殖の概要を学んだ。錦鯉は生まれたときは1cmほどの稚魚であるが、2年目の秋には約60cmに成長する。養鯉業に携わる人々のたゆまない工夫や努力に子どもたちは新鮮な印象を受けていた。

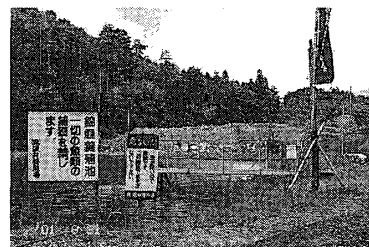
第3時は、広島で養鯉業が盛んな自然条件を取り上げた。学習課題は「広島県で錦鯉がたくさん育てられているひみつをさぐる！」である。養鯉業には、「水」「土壌」「ため池」の3つが欠かせない条件となっている。授業では、実際に養鯉場で使われている土壌を提示し、花壇の土、砂場の砂と比較した。また、広島県は降水量が比較的少なく、県中央の世羅台地だけで約25,000個ものため池があることを伝えた。これらのことから、子どもたちは、地域の自然条件と結びつけて、広島県で養鯉業が盛んに行われている背景を捉えることができた。



《森が育む水》



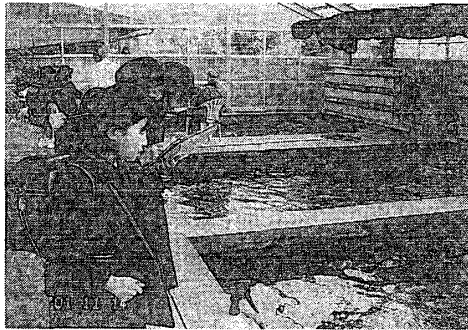
《粘土質の土壌》



《野池に使われるため池》

第4時は、広島市にある「小西養鯉場」を事例に、錦鯉養殖に携わっておられる具体的な「人」に焦点を当てることとした。現在の小西養鯉場代表一小西丈治氏の祖父に当たる各一氏は、今から約90年前、新潟から持ち帰った錦鯉をもとに広島で養鯉業を興されている。丈治氏の父利勝氏を経て、広島を代表する養鯉場として現在もその地位を確固たるものとされている。利勝氏がまとめられた文献を参考にし、「鯉にこいした人」の学習プリント、「広島と鯉の歴史」年表を作成した。小西氏三代が、より美しくより優雅な錦鯉を育てるため、ニシキゴイのよさを海外に広めるために様々な工夫や努力をされている様子を学んだ。

続く第5～7時は、「小西養鯉場」の見学計画を立て、実際に見学に行った。事前に子どもたちの質問事項をFAXで送信し、質問に答えていただくこととした。質問事項については、全体で確認し合い、高め合うこととした。見学当日、子どもたちは養鯉場の錦鯉の多さやその種類の多様さ、さらには、働いておられる方々の真剣な目つきや機敏な動きに目を見張っていた。また、丈治氏に一つ一つ丁寧に質問に答えていただいたことは、大きな喜びと深い理解につながったようである。



《鯉の多さに思わずびっくり》



《丁寧に答えてくださった丈治さん》

③ 第三次の概要

第1時では、広島県と並ぶ錦鯉の産地—新潟県との結びつきについて学習を進めた。学習課題は、「なぜ、新潟と広島が錦鯉の二大産地になったのだろうか？」である。広島県での養鯉業の自然条件として「水」「土壌」「ため池」の知識が、新潟県での条件とどう結びついているのかを探っていった。その際に使用したのが新聞記事「名水あれば鯉は鮮やか酒は絶品—決め手は良質の軟水—産地の広島・新潟調査」^{注1)}である。養鯉業には、「水」「土壌」「ため池」の3つが欠かせない条件となっている。中でも両県に共通する「軟水」は美しい錦鯉を育てるうえで決め手となっている。授業では、実際に軟水と硬水のミネラルウォーターを飲み比べたり、石鹸の泡立ちの様子を観察したりした。これらのことから、子どもたちは、広島と遠く離れた新潟における養鯉業の適地条件を捉えることができた。

第2時は、ニシキゴイが世界各地の人々に愛されている理由をその国の文化と絡めて考えていった。現在、ニシキゴイは東南アジア、欧米を中心に世界20カ国以上に輸出されている。ニシキゴイが海外で受け入れられている理由は、その国の文化と深く関わっている。例えば、中国文化圏では、「紅白」の「紅」が縁起の良いことや「黄金」が金運とかかわっていることが挙げられる。また、ヨーロッパでは、ガーデニング文化と相まって池に色つきの淡水魚であるニシキゴイを飼育することに人気があるという。さらに、南米では、日本からの移民がニシキゴイの普及に活躍している。実際の授業では、ドイツでの品評会の様子の写真を提示したり、輸出先を世界地図に書き込んだりする作業を通して、「なぜ、世界各地の人たちは、ニシキゴイにこいしているのだろうか？」という学習課題を設定した。予想について話し合った後、ニシキゴイと各国の文化との関係を説明してくださった小西丈治氏のVTRを視聴した。このVTRから、子どもたちは、ニシキゴイが世界各地の様々な文化の中で愛され、育まれていることに気づくことができた。

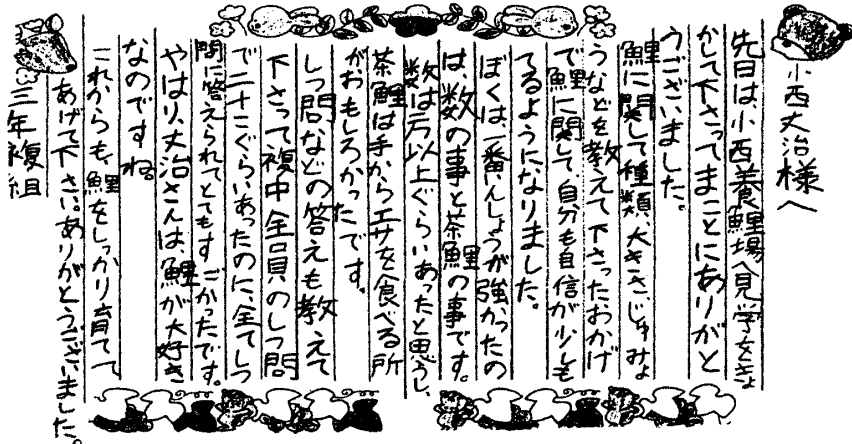
4 授業実践の分析と考察

(1) 分析の視点①について

分析の視点①は、次の通りであった。

分析の視点①：地場産業の一つである養鯉業を取り上げたことは、児童の人とのかかわりを促したか。

ペットとして飼育されていることもあり、錦鯉は、子どもにとっても身近な「もの」と言える。第二次から広島にある具体的な養鯉業者の方を取り上げた。地域で活躍されている「人」との出会いは子どもたちにとって新鮮なものであった。実際に見学に出かけた際も、丁寧に質問に答えてくださったり、普段は見ることのできない温室内の大型水槽を見せて頂いたりすることで、子どもたちは、様々な発見をしたり気づきをもったりすることができたようである。次頁に掲載した子どもの見学のお礼の手紙からもそのことが伺える。



《小西さんへの子どもたちの礼状》

(2) 分析の視点②について

分析の視点②は、次の通りであった。

分析の視点②；ニシキゴイが海外で広く受け入れられていることから、児童は、ニシキゴイと海外との結びつきを文化の面から捉えることができたか。

事前の教材研究で、小西養鯉場と取引をされているイギリスの輸入業者の方からメールで情報を頂くことができた。また、香港の輸入業者の方や初めてハワイにニシキゴイを輸出された利勝氏から直接取材することもできた。これらの事実から、子どもたちは、広島産のニシキゴイが広く海外で愛好されている事実をつかめたようである。そして、その背景には、それぞれの国の文化と結びついていることも理解することができた。そのことが、地域のよさに改めて気づく機会となったと考える。



《海外の雑誌を彩るニシキゴイ》

5 おわりに

本稿は、身近な地域の地場産業である養鯉業を学ぶことを通して、地域の産業の概要やその役割を捉える共に、養鯉業で働く人々に目を向け、地域の産業と国内や海外との結びつきを「人やもののかかわり」から捉えることをねらったものである。

錦鯉という子どもたちにとって身近な題材を取り上げることで、ねらいを達成することができたと捉えている。また、本実践では、中学年児童が同単元同内容の学習を行うことで、互いの学びのよさや発想のおもしろさを共有できるように配慮した。例えば、学習課題に対する予想や学習のまとめの発表では、できるだけ異学年のペアを組むようにした。ねらいを達成するうえで一定の成果を上げることができたと考える。しかし、異程度の内容をどう設定し、どう評価していくか、課題も残った。来年度から2学年を見通した教育課程を編成していくうえでの課題としたい。

〈引用文献および注〉

1) 文部省、「小学校学習指導要領解説社会編」, 日本文教出版, p. 54, 1999.

2) 中国新聞, 平成11年4月17日付け夕刊より